

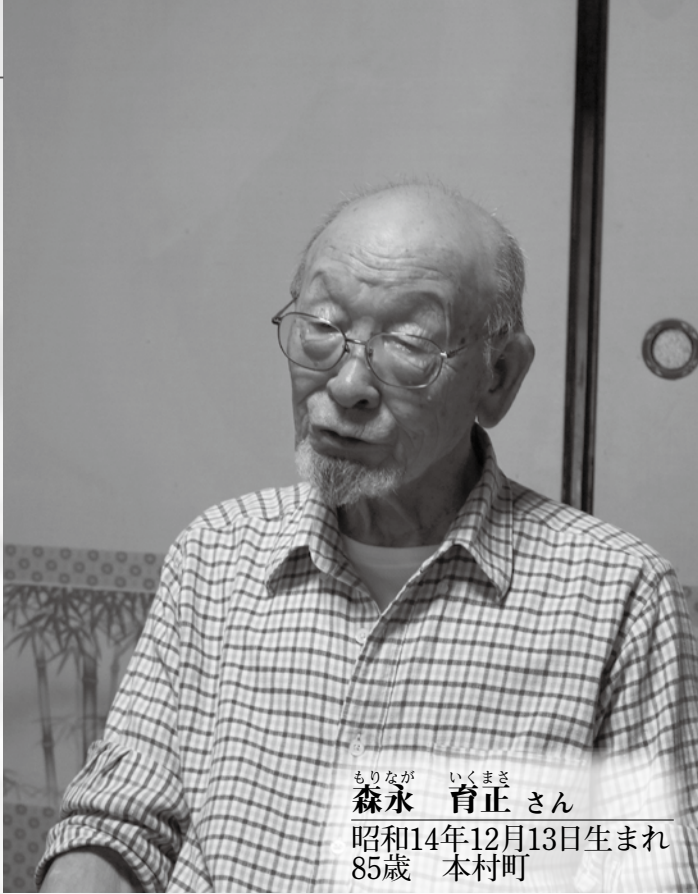
語り継ぐ平和への思い

残された家族の思い

総務課総務法制係 ☎ 0824・73・1123

多くの尊い命が失われ、多くの人が傷ついた、あの戦争が終わってから80年――長い年月が過ぎた今でも、その時に負った体や心の傷で苦しんでいる人がいます。そして、家族を亡くした人の悔しさ、悲しさも決して消えることはありません。しかし、時の流れとともに、当時を知る人の高齢化が進んでいます。その人たちの「思い」が薄らぐことは決してありませんが、私たちがその「思い」を聞き、引き継いでいくのは、今なのではないでしょうか。

今回は、先の戦争により、大切な家族を失った遺族の「思い」をお聞きしました。皆さんもこの「思い」を知り、命の尊さ・平和の大切さについて考えてみましょう。



森永 育正 さん
昭和14年12月13日生まれ
85歳 本村町

父の記憶

森 永育正さんは、昭和14年に父・正さん、母・ハヤ子さんの長男として生まれました。

家族は、4歳年上の姉との4人で、育正さんが4歳になるまで、呉市で生活していました。

正さんは海軍軍人で、育正さんが生まれた当時は江田島の海軍兵学校に所属していましたが、昭和15年、最期まで

運命を共にすることとなる巡洋艦「神通」の乗組員となりました。

「神通」は、昭和16年11月に、寺島水道（長崎県）を出発し、東南アジアに向けて南下しました。「神通」がパラオに入港したところ、太平洋戦争が始まり、正さんも「神通」と共に、ミッドウェー海戦やガダルカナル島の戦いなどに参加したそうです。

これらの戦いに敗北して以降、戦局は日本にとって、次第に厳しくなっていきます。

そして、正さんが乗り組んだ「神通」は、最後の戦いに参加します。ソロモン諸島で行われた戦いの一つ、昭和18年7月12日に火ぶたが切られたコロバンガラ島沖夜戦です。「神通」は、相手方巡洋艦4隻と交戦。探照灯を照射し、照準射撃を行うも、相手の集中砲火を浴び、船体を真つ二つに分断され、乗組員を乗せたまま海底約1千メートルに沈んでいったそうです。

これが、正さんの最期でした。育正さんはその時、わずか3歳でした。

育正さんは「父はほとんど家におったことはないんじゃないか。父に何かをしてもらった



▲正さんが乗り組んだ巡洋艦「神通」(森永さんより提供)

私たちができること

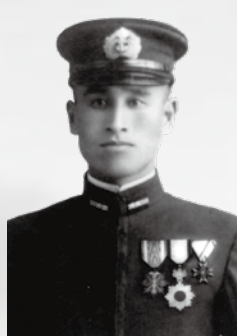
今回の取材の中で、育正さんは「戦争というのはいけん。戦争は悲しみしか残らない。寂しい思いを随分してきた。争いごはいけん。一家だんらんのほうがええ」と、平和への「思い」を語ってくださいました。

戦争により生み出されるものがあるのでしょうか。あったにせよ、人の命と引き換えにして生み出されたものに、どれだけの価値があるのでしょうか。

戦後80年の節目にあたり、私たちは平和の尊さとその継続の重要性を改めて胸に刻む必要があります。

戦争は、無条件に人の命を奪い、傷つけ、憎しみ、悲しみを残します。平和は決して当たり前ではなく、守り育てるべき宝物なのではないでしょうか。

今回の取材で聞かせていただいた「思い」を平和への思いとして、未来へと伝えることで、次世代が平和な社会を築く礎となることを願います。



父・正さん



▲ガダルカナル島の戦没者慰霊碑



▲共に埋葬された家族の写真

父を捜しに

育正さんは、自分の年齢が父が戦死した時の年齢を超えたことを契機に、昭和51年2月から3月までの1カ月間、ソロモン諸島で実施された遺骨収集に参加しました。

島の港には、日本軍が残っていた大砲が並び、トーチカ（敵からの攻撃を防ぐために設置された頑丈な小屋や構造物）の中の壁面には、たくさん

の言葉が残っていました。その多くが「万歳」ではなく、「お母さん…」など、家族へ向けた言葉ばかりであったそうです。

「本当はあるのだろうか、『万歳』の書き残しは見つけられなかった。兵隊は見知らぬ地で命を懸けて戦っている。怖いだろうし、これが本当だなと思う」と育正さんは話します。

コロバンガラ島から

正さんは、日本から遠く離れた、ソロモン諸島コロバンガラ島沖の海底約1千メートルに眠っています。ハヤ

子さんは、生前、遺骨が帰ってくることはありませんかと思っていたようで、墓参りにいくと「お父さんは海の底にいる。ここは空っぽ」とつぶやいていたそうです。

ハヤ子さんが亡くなり、三回忌を迎えるころ、奇跡が起ります。育正さんは、ソロモン諸島方面の戦没者帰還事業を行う団体へ、現地での正さんの慰霊を託しましたが、ハヤ子さんの三回忌の前日、その団体から、正さんの眠る地、コロバンガラ島の砂と小石が、育正さんのもとへ届けられました。

育正さんは感無量。「おやじ、やつと帰ってきてくれたかー」と、受け取った手は震えていたそうです。

その一握りの砂と小石は、家族の写真と共に、ハヤ子さんの三回忌の日、森永家の墓に埋葬され、ハヤ子さんと一緒に眠っています。



—あなたが考える「愛と平和」とは

それは、隣人を愛し、相手の気持ちになって自分も考え、尊重することだと思っています。相手を尊重していれば、相手の人が悲しんでいれば、その悲しみがわかるような、自分の心も掘り下げて物事を考えるようになると思います。

この相手を思いやる心があれば、問題が起きてても、平和に物事を解決することができるようになり、争いも起きることはないと思います。

国と国がお互いに尊重しあえば、戦争も決して起きることはないと思っています。

庄原市非核平和都市宣言

永遠の世界平和の実現は、人類共通の願いです。

しかし今もなお、世界では地域紛争やテロの頻発など、人間の生命の尊厳を踏みにじる行為が繰り返される中で、核の小型化や拡散が進み、世界の平和と人類の生存に深刻な脅威をもたらしています。

庄原市は、世界最初の被爆県の都市として、その惨状と被爆者の苦しみを思い、この地球上で再びヒロシマ・ナガサキの惨禍を繰り返してはならないことを強く全世界に訴えます。

私たち庄原市民は、生命の尊厳と平和の尊さを深く認識し、一刻も早い核兵器の廃絶と永遠の平和を希求し、ここに非核平和都市を宣言します。

平成17年7月1日、本市は、世界最初の被爆県に新しく生まれた都市として、核兵器のない平和で安全な世界を実現するため、議会議決を得て、非核平和都市宣言をしました。

この宣言発出は、核軍縮・核不拡散が国際社会の中で合意に至らず、大量破壊兵器の拡散が続き、世界平和と人類の生存に深刻な脅威がもたらされていたという、核をめぐる当時の国際情勢を背景としています。

この宣言から20年が経過した今もなお、全世界で1万2千発以上の核兵器が保有され、使用されかねない危険性すら高まっています。

二度とあの惨禍が繰り返されることがあってはなりません。本市は、市民の皆さんと共に、生命の尊厳と平和の尊さを深く認識し、世界に向けて「非核平和」を訴え続けていきます。

庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典

本市の戦没者に哀悼の意を表し、恒久平和を祈念するため「庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典」を開催します。

多くの皆さんのご参列をお願いします。（申し込みは不要です）

とき 8月20日(木) 10時～
(開場は9時～)

ところ 庄原市民会館 大ホール

その他 ▼当日は要約筆記による案内があります。

▼職場や家庭などでも黙とうをお願いします。

▼8月12日(火) 18日(月)、市役所本庁舎1階市民ホールで折り鶴などを展示します。

▼8月21日(木)からは、口和支所、高野支所、比和自治振興センター、東城支所、ウイル西城、総領保健福祉センターの順で、折り鶴などを巡回展示します。

問い合わせ

社会福祉課社会福祉係
☎0824・73・1153
または各支所地域振興室



「愛と平和のメッセージ」

広島に原子爆弾が投下されてから80年。今もなお、核兵器をめぐる情勢は混迷を極め、「核兵器のない世界」の実現は、遠のいてすらいると感じられる危機的状況にあります。

核兵器廃絶につながる、出口の見えない暗いトンネルの中、闇を照らす一筋の光となるべく、自らシャッターを切り、切り取った瞬間に「愛と平和」のメッセージを乗せ、世界に向けて発信し続けている、本市出身の写真家・宮角孝雄さんにお話を伺いました。

▲写真展で平和への思いを語る宮角さん(右)と妻の智子さん

1948年(昭和23年)生まれ。
本市出身で被爆二世。東京を拠点として雑誌やコマーシャルフォトのカメラマンとして活動。
2000年(平成12年)からは原爆ドーム前で人々の肖像を撮ることをライフワークとし、作品を通して世界に愛と平和を訴える活動を続けている。

写真家
宮角孝雄

—この活動を始められたきっかけは？

私は被爆二世であり、家族は被爆者なんです。父と祖父は、家族を庄原に疎開させた後、自分たちも庄原へ疎開しようとして広島駅で列車を待っていた時に被爆しました。父と祖父は命を取りとめました。父は屋根の下敷きになり、頬を五寸釘が貫通するほどの大けがを負いました。

もう一つは、私の父と教師だった祖父の確執があります。私の祖父は、父には弁護士のような職業についてほしいと考えていましたが、父は仕官して「お国」のために尽くしたいと考えていたそうです。

それに祖父が反対したこととで「ずっとお国のために尽くすのが務めだと生徒に言っていたのに、なぜ自分にだけそんなことを言うんだ」と父は反発し、確執ができてしまいました。それは、祖父の名前の「みやかど」を、祖父とは違う「みやかく」と名乗ったからです。

私は、いずれも、「戦争というものがなければ生じな

かっただろう」と思っています。これらが、平和への思いを抱いたきっかけです。



撮影：宮角孝雄

—原爆ドームの前でカップルがキスをしている写真が印象的です

私は、平和への思い、特に原爆のことを写真で表現したいと思い、1999年12月31日から2000年1月1日の夕方まで徹夜をして原爆ドームの前で写真を撮っていました。そこへ、

平和を求めて自転車で各国を巡り、平和を発信する団体・ピースライドが、1年半かけて40数カ国を巡り、最後、広島から平和を発信しようとして、原爆ドームに到着していました。すると、そのメンバーの2人が、プロポーズの後、キスしました。その瞬間をたまたま撮ることができた、いまだに心がうれしくなる写真なん

です。「愛と平和」を感じました。

—これらの作品のスタイルについて教えてください

私は、戦場の悲惨な写真のような、1回見ればもう分かったよ、という写真ではなく、日常に接した、誰もが掘り下げられる、心で本当の平和を考えていくような写真が撮れたらいいなと思っています。

それで、原爆ドームの前で、目を閉じて平和について考えてもらった瞬間や、キスの瞬間を撮るといった形で表現しています。

「本当に原爆ドームの前でキスの写真を撮っているの？」と思う人がいるかもしれない。

確かに、ある種の危険性を孕んでおり、何かの拍子に叩かれたら写真家生命がなくなるかもと、いつも思いながらも、このスタイルを貫いています。

あいさつにキスをするという文化圏もあり「愛情表現」としての側面を強調し、伝えていきたいと思っています。